ヤスクニ通信　No.249　2020 年 12 月 18 日
発行　靖国神社国営化反対福音主義キリスト者の集い（略称「つどい」）　代表・星出卓也（Tel/Fax042-458-0251）
事務局　西東京市柳沢 2-11-13 西武柳沢キリスト教会気付　HP https://yasukuninotsudoi.christian.jp/
例会　毎月第3金曜日 7:00～9:00pm（休日の場合第 4 金曜日）
会場　たんぽぽ舎　（注）2021 年より会場は NCC フリースペースに変更します（新宿区西早稲田 2-3-18　日本キリスト教会館 24 号）。

ヤスクニ・レポ　249

カジノ誘致の是非を問う住民投票を求めて

柴田智悦（日本同盟基督教団　横浜上野町教会牧師）

神である主は、創造の初めから労働（耕すこと）を人類生存の掟として定められました（創世記2:15）。「耕す」という意味のラテン語（colere）が英語（cultivate）の語源となり、「心を耕す」、「親しくなろうとする、交際を求める」という意味が加わり、「文化(culture)」という言葉ができました。労働を通して文化が生まれるのです。しかし、人が神である主に逆らい罪を犯しますと、それまで楽しかった労働が苦痛となり、人は主が備えられた豊かな食物によってではなく、「顔に汗を流し」労苦して自分の命を養わなければならなくなりました（創世記3:19）。つまり、働かなくては食べられないようになったのです。それだけではなく「働きたくない者は食べるな」（2テサロニケ3:10）と、働かないで食べること自体が罪であるように定められました。人は自分の手で労苦して自分の命を養い、人間社会を形成すべきであり、労働することで自分の命に対して責任をもつようにされたのです。「落ち着いた生活をし、自分の仕事に励み自分の手で働くことを名誉としなさい」（1テサロニケ4:11）。「落ち着いて仕事をし、自分で得たパンを食べなさい」（2テサロニケ3:12）。こうして、人間社会が正しく発達するためには各自が与えられた仕事を忠実に果たさなければならないようになったのです。各自が社会の構成員として自分の仕事に全力を尽くすときに、その社会は健全であるのです。このように、アダム以降、すべての人は、「たゆまず良い働き」（2テサロニケ2:13）をすることによって自分の生存や文化発展を担うようになりました。

従って、現在、国を挙げて誘致しようとしているカジノは、働かないで糧を得ようとするものであるばかりか、何も生産しないで他人（賭けに負けた人）の金を奪い取る行為ですから、聖書の教えに真っ向から対立するものです。

そもそもカジノは賭博（博打）であり、日本で賭博は689年の「すごろく禁止令」以来、1300年以上にわたって禁止されており、現在は刑法に規定されている「賭博及び富くじに関する罪」にあたる犯罪行為でした。それが、2016年12月に「統合型リゾート（IR）整備推進法案」（通称「カジノ法案」）が成立したことによって、合法化されたのです。

2020年11月13日、カジノの是非を決める横浜市民の会は、「カジノ誘致の是非を問う住民投票条例制定を求める直接請求署名」208,073筆を横浜市内18区の選挙管理委員会に提出しました。横浜市の有権者数は3,127,017人であり(2020/9/1現在)、地方自治法が定める条例提案に必要な法定数である50分の1は62,541筆ですから、必要数の三倍を超える署名が規定のわずか2ヶ月の間に集められたことになります。これは、横浜市が進める、カジノを含む統合型リゾート（IR）誘致に対してその是非は市長の一存ではなく、（賛成であろうが反対であろうが）受民投票で決めようという趣旨のものです（が、実質的には反対署名に等しいと言えます。賛成派は住民投票など求めていませんので）。現横浜市長は市長選の時にはIR誘致を白紙としておきながら、当選後、民意を問うことなく突然2020年代後半を目指し、IRを山下埠頭に誘致すると発表しました。このこと自体、憲法第92条に規定されている地方自治の基本原則に反し、民主主義を揺るがす問題です。

さらに横浜市は、署名を提出した二日後の各紙朝刊に『広報よこはま特別号　みんなが楽しめる未来のまち横浜イノベーションIR　統合型リゾート』を90万部、折り込みで各戸配布したのです。その中には、老年人口が増え、生産年齢人口が減ることから、将来の働き世代の社会的負担が増えることをあげ、IRによって市民生活に経済的社会的効果が生まれることを謳っています。横浜市は「IRの方向性（素案）」において、IR訪問者を最低2000万人、消費額を最低4500億円と見積もり、年間最低820億円の税収を見込んでいます。しかし、それはコロナ以前の試算であり、事業者の提供した情報を前提としたものに過ぎません。このコロナ禍の社会において、2000万人もの人がIRに訪れること、さらにクルーズ船で外国人がカジノに来ることは考えられません。しかもカジノは、外界と遮断された窓もない閉鎖空間に客を詰め込み、24時間賭博にのめり込ませるものであって、いわゆる「3密」（密閉、密集、密接）を絵に描いたようなものです。また、カジノ税制が導入されますと、訪日外国人は所得税非課税になりますが日本人の場合は一時所得として所得税、住民税の対象になりますし、負けた賭け金も一時所得では控除できないために儲け以上に税金がかかることにもなるのです

(2020/12/10三木義一「本音のコラム」、東京新聞)。

それより、将来を担う子供たちに対して行政はもっと責任を持つべきで、たとえば横浜市の公立中学校では政令市においては唯一給食が実施されていません。一時的な収入を得ることよりも、将来を見据えた政策を積極的に実施してもらいたいものです。

さらに、安心安全なIRを目指して、と題して世界最高水準の規制に基づきギャンブル等依存症対策に取り組むことなどが挙げられています。しかしそれは、今年のコロナ禍における緊急事態宣言による営業自粛要請の中で、パチンコ依存症が浮き彫りにされたように、世界最高水準の規制が必要なほどギャンブル依存症が増える可能性があるということです。また、犯罪防止のための入場制限や、事業者の徹底的調査などを挙げています。それもつまりは、「安全・安心対策の横浜モデルの構築」を進めなければならないほど、治安の悪化が懸念される、ということです。山下埠頭は有名な観光地であり、市民の憩いの場でもあり、幼児や小学生の遠足や中高生の修学旅行でもよく訪れる山下公園に隣接しており、一般市民や観光客にも影響が及ぶことが懸念されています。

カジノ推進派はよく、IR＝カジノではない、といいます。ならば、わざわざ法律を変え、長年培って来た慣習を変えてまでして賭博であるカジノを導入するのではなく、カジノ抜きのIRを整備したらいいのです。しかし、それ以外の施設は横浜にこれ以上必要ないばかりか、それだけでしたら収入雨が見込めず、周辺商業施設からも猛反発を被るでしょう。結局、カジノ抜きのIRは考えられず私たちもまさにそのカジノのことを問題としているのです。

ところで昨年、ラスベガスに多数のカジノリゾートを所有する大企業、シーザーズ・エンターテイント社が撤退を表明し、今年5月13日、世界最大のカジノ運営会社である米国のラスベガス・サンズ社もIR整備法の不備を理由に撤退を表明しました。続く8月2日、やはり米国のIRカジノ事業者であるウィン・リゾーツ社が「パンデミックは統合型リゾート開発にかつてない悪影響を及ぼしている」との理由から横浜事務所を閉鎖し、事実上の撤退を表明しました。その結果、現在残っているカジノ事業者はアジア系のみとなっています（華僑系2社、マレーシア系1社、日本1社、非公開1社）。そのような状況にありながら、横浜市は、11月30日に第1回事業者選定委員会を開催しました。私たちは横浜市長が「個別案件に関する住民投票条例案」を市議会に提出し、それが市議会の審議をへて可決され、住民投票が実施されることを願っています。それは、地方自治法に保障されている直接請求権の行使であり、直接民主制度を活用して市民が主権者としての意思を表明することだからです。

コロナ禍にあってなお、カジノを含む統合型リゾート（IR）住民投票実施を求める声がこれだけあるのですから、審議のあり方次第では議会の意義も問われます。議会がどのような結論を出すか注目していきたいと思います。

２０２０年１１月２０日例会奨励「みことばの種によって生きる」

ルカの福音書８章４～１５節　須田毅（JECA 西堀キリスト福音教会）

主イエスは「種は神のことばです」とおっしゃって語られるが、このたとえの中で「種」と「種が落ちた土地」とが混同されて語られているが、その表現は主イエスの意図したところなのだろう。主イエスは神のことばを受け入れる信仰者の心や態度を、この数種類の土地として表しておられる。種の成長は、種を受け止める土地の成長とでも言えるように、主イエスは信仰者の成長について関心を持っておられる。

道端に落ちた種は、ほとんどその人にとどまるものでは、残念ながら、なかった。次の岩の上は、最初には喜びがあるも、揺り動かされてしまう信仰者の姿を示す。茨の中に落ちた種も、うまく成長しない。生活における思い煩いなどが、その成長をふさぐかのように(別訳「窒息させるかのように」)妨げる。日常の信仰生活は、茨の中で窒息してしまうことが、当然であるかのような毎日だ。私たちはみことばを聞いて、その恵みによって成長する道を、この状況でも学ばなければならない。

良い地では、種は成長し、多くの実りをもたらす。「良い地」は、信仰者の心を表していると主イエスはおっしゃる。「立派な良い心」は「美しい良い心」とも訳している聖書もある。「立派な」は、「優しい」「適切な」「整っている」「繊細な」など、少し広い意味領域を持っている。みことばを受け止める心として、このような態度が必要だと、私たちも理解できる。

地上で何の遠慮もなく、神のみことばに聞く喜びを表して生きることは、それほど難しくないようにも思う。しかし、現実には政治社会的な状況で忖度をし、遠慮をして、信仰者は生活している状況もある。率直に信仰の実りをもたらそうとしても、種を取り去る悪魔がいたり、成長をふさぐ茨はたくさんある。しかし、私たち日本のキリスト者は、信仰の成長不振を外部の原因に押し付けてよいのだろうか。みことばの種は成長するに優秀なのだ。聞き手が良く受け取れば、必ず育つのだ。社会的な課題に信仰者がきちんと取り組むのは、主イエスへの感謝を率直に表す信仰の態度に如何なのであろう